一本の旗——アチェからのメッセージ

山本 博之（やまもと ひろゆき）
地域研究企画交流センター

津波から1カ月半後のウレレー海岸。右手前方に旗が立てられている

津波から一カ月半が経ったインドネシアのアチェ州を訪れた。スマトラ島の北西端にあるウレレー海岸では、津波ですべての建物が流された跡に旗が一本立てられていた。

かつてアチェは、世界各地の人や物が出入りすることで栄える土地だった。しかし、およそ一〇〇年前にこの地域に国境と領域支配の概念がもちこまれて以来、アチェは世界との自由な交流が断たれ、かつてアチェを特徴づけていた外部社会とのつながりという「アチェらしさ」が発揮できない状態が続いてきた。今回、未曾有の被害を出した津波にわずかなりとも救いを見出すとしたら、世界中の人びとの関心をアチェに向けさせ、アチェの人びとを再び世界とつなぐ契機を与えたことだといえるだろうか。

州都バンダアチェを歩いていて、尋ね人の貼り紙をよく見かけた。多くは顔写真入りの白黒コピーの簡単なものだ。あちこちに貼られていたが、市場のように地元の人びとが集まる場所より、災害対策本部や空港で目立った。これらはいずれも外国人が集まる場所だ。世界の人びととつながりたくても発信する手段をもたない人びとは、外国人が集まる場所に自分のもっている情報を貼り出すことで世界に発信しているということなのだろう。

写真のコピーをとって貼り紙が出せるのは、肉親や友人の写真が手元にあり、コピー代が払える幸運な人びとだ。では、それができない人はどうすればよいのか。

ウレレー海岸は、津波の被害が大きく、バンダアチェに来た人びとがまず訪れる場所のひとつだ。そこに旗を立てるのも、訪れる人びとを通じて世界になにか伝えたいという気持ちのあらわれなのだろう。旗を見てなにを読みとるかは人それぞれだろうが、わたしには、ここに生きている人がいるのだというメッセージが感じられた。想像を絶する規模の津波に遭いながらもなお生き延びているのだという人間の生命力そのものだ。被災地から世界全体に向けた「希望を失うな」という呼びかけだといっても過言ではあるまい。

なにもかも失った人びとが、それでも自らの存在をうったえたいと思い、瓦礫（がれき）のなかで見つけたのが旗だったのだ。その旗がインドネシアの国旗なのか、それとも別の旗なのかというのは野暮な質問だろう。アチェの人びとは、自分たちのもてるものを最大に利用して、外の世界と通じるという「アチェらしさ」を取り戻そうとし、それによって被災を乗り越えようとしている。

今月二六日で津波から六カ月を迎える。その後、何度か大きな地震が起こったが、最近テレビや新聞でアチェの様子を見聞きすることはあまりなくなった。外部世界とのつながりを求めてアチェから発信されているメッセージは、わたしたちにうまく届いているだろうか。

家の残骸。壁には「この家のもち主はまだ生きている」とある

災害対策本部の門柱に貼られていた尋ね人の貼り紙